修 士 論 文 要 旨

学籍番号 20GH104 第 号	氏 名 櫻庭陸央
人文社会科学 専攻（コース：文化芸術 ）	

論文題目

東北地方太平洋側における縄文時代の動物資源利用・解体技術の研究

本研究では、縄文時代東北地方太平洋側の遺跡から出土した動物遺存体と刃器類の分析をもとに、当該地域における動物資源利用と解体技術について検討を試みた。

従来、縄文時代の東北地方太平洋側における動物資源利用については、主に三陸地方以南を対象とした検討が実施されてきた。この点から、本研究では青森県七戸町二ッ森貝塚（縄文時代前期～中期）、東北町古屋敷貝塚（縄文時代中期）を対象に分析を実施し、比較的検討が低調であった東北北部域の様相を明らかにした。そして、以南地域との比較を試み、東北太平洋沿岸域における動物資源利用に関する共通性や地域性について考察をおこなった。結果、円筒土器文化圏ではニホンジカ・イノシシ主体、大木式土器文化圏では魚類主体という差異がみられ、土器文化圏で脊椎動物遺体の様相が異なる点が明らかとなった。これに対して、魚類・貝類組成では土器文化圏の相違をまたぐ共通性が確認された。すなわち、二ッ森貝塚・古屋敷貝塚が位置する小川原湖沿岸域では魚類が内湾～沿岸浅海性主体、貝類では海水性と汽水性主体であるのに対し、八戸地域～三陸海岸では魚類が外洋性主体、貝類が海水性主体であるという点が明らかとなった。

また、これまでは沿岸域における貝塚が分析の主な対象であった点をふまえ、内陸部への着目が必要であると考えられた。そこで、宮城県栗原市山王囲遺跡（縄文時代晩期中葉～後葉）の分析を試み、内陸部集落の動物遺存体の様相について明らかにした。加えて、周辺遺跡との比較から内陸部における動物資源利用について考察した。特に、鳥獣類組成について検討した結果、山王囲遺跡のように比較的上流に位置する遺跡ではニホンジカ・イノシシに特化するのに対し、下流の遺跡では中・小型獣や鳥類が一定量含まれるという多様性が確認された。

さらに、上記のような動物資源利用の検討をふまえつつ、動物資源の解体技術についても検討を試みた。これまでの動物資源獲得後の段階に関する研究では、骨角器の製作技術を例とした加工段階に関する検討や部位組成の算出をふまえた利用形態に関する検討はみられたが、これらに比して解体段階における検討は比較的低調であった。この点をふまえ、本研究では二ッ森貝塚および山王囲遺跡を対象に、動物遺存体（ニホンジカ・イノシシ）に残る解体痕の属性分析を実施するともに、二ッ森貝塚出土石器のなかでも刃器類に着目し、技術・機能形態学的分析をおこなった。このような、解体対象物と解体具という双方の視点に基づく多角的な分析例は未だみられないものであり、本研究のオリジナリティーである。

そして、これらの双方の考古学的事象をふまえつつニホンジカ・イノシシの解体実験を実施し、その比較から二ッ森貝塚における両種の解体技術について検討した。その結果、両種とも特定部位を搬入していた点、解体具には剥片を主体的に用いていた点などが明らかとなった。また、この二ッ森貝塚の様相をもとに解体痕観察を実施した山王囲遺跡についても検討した。結果、本遺跡ではイノシシのみが特定部位を搬入しており、解体にはスクレイパーが使用される頻度が比較的高かったと推定された。このような、解体プロセスおよび解体具に加えて、解体の各作業（皮剥ぎ、分離、肉の切り取り）についても遺跡では類似点と相違点が確認され、縄文時代東北地方太平洋側における動物解体技術に関する共通性と多様性が見出された。